

第 1 回 地域づくり部会

日時 令和 6 年 1 0 月 3 日 午後 6 時～ 8 時

場所 新宿区本庁舎入札室

参加者 椎名 宮端 末永 友利 山崎 今井 内藤 三浦 早田 塚本

大竹（どまーに・部会関係者） 伊藤（まど・部会関係者）

事務局 武藤 中野 石丸

委員からのご意見

※「障害者の居場所を今後どうしていくのか」（アンケート番号 4・8）という部分に焦点を当てながら話が進んだ。

☆障害者の居場所（住居関係）

- ・ 障害者の住宅の契約の問題が起こりやすい。しかし最近は支援者がいると業者側が受け入れやすくなってきており社会が変わってきた。昔は支援者がいると悪い影響があったが変わった。
- ・ ある GH を作ろうとしたときに地域住民からものすごい反対運動がおこった。こういった反対意見は障害への理解のなさから起こる反応だと思われるので、理解啓発活動を続けていくしかない。障害者を理解してもらうためにウィークポイントではなくストロングポイントに焦点をあてて社会に発信していくべき。
- ・ 障害者の高齢化による地域問題が発生している。地域の集会にも高齢者は集まってこず、若者も寄り付かない。

☆障害者の居場所（日中の活動の場）

- ・ 最近は企業側が障害者と関わって何かしていこうという意識が強くなってきていると思われる。そこを利用していくことによって障害者の活動の場を作り出していきたい。しかし、現状ではどのような協力をしていけば企業と障害者が winwin の関係になれるのかわからず歯がゆい思いがある。また企業も利益が見込まれる事業でないと協力をしてくれる可能性は低い。
- ・ 障害者雇用において企業が身体障害者を雇用したがなかなか就業状況が良かった。そのため精神障害者を雇い入れて新たな対応しようとしたがうまくいかなかった。
- ・ B 型作業所の新しい取り組みとしてインターネットやパソコンを利用したものが多くなってきた。新宿区という土地柄もあると思うが新しいものを育む素養があるようだ。郊外から若者を呼び込むのに適しているのだろう。このような部分で企業とのコラボレーションがあるといいと思う。
- ・ 企業において「障害者への理解」は重要になってきている。ニーズがあるのでそこに啓発活動しに行くことが多い。
- ・ 障害者の作品展や自主製品の販売などがよくある。理解啓発の一環でやっているとは思いますが、障害者の能力が低く見積もられかねない値段設定をみると本当にこれでいいのだから

うかと思うことがある。

- ・社会の偏見を取り除くためには作品展などをおしてわかってもらうことは重要である。障害者の強み弱みは一連でつながっているのでどちらか一方を見せるよりすべてを見せた方が良い。それが偏見をなくすことにつながる。

☆障害福祉サービス等事業所の人材について

- ・人材が育たない。ベテランと若手のコミュニケーションも昔と違い変化しているので技術の伝承が難しい。

まとめ

障害者の居場所について「居住関係」と「日中活動の場」についての中心的な話し合いになった。

障害者の居住関係については昔と比べれば個人の賃貸契約は結びやすくなったものの、GH等の施設の建造に関しては未だ反対運動が大きく起こるほど難しい現状がある。これはひとえに「障害」への理解が不足しているからだと考えられるため理解啓発活動が大事である。理解啓発活動についてはストロングポイントとウィークポイントを一連のものとしてとらえ社会に訴えていくことが大事である。

また、障害者の日中活動の場については企業を呼び込むことで場を提供していきたいが、現状は企業と障害者の間にうまく架け橋を作れない状態である。社会貢献をしたい企業をどう取り込んでいくかが大事である。

そこに付随して場を供給していかななくてはならない障害福祉サービス等事業所スタッフの高齢化も問題になっており、次世代を育てていく方法も探していかななくてはならない。